

【乳幼児観察への覚え書き】 ～精神的分析的 トレーニングの基礎として～ (1964)

Esther Bick

乳幼児観察 (Infant Observation) は、ロンドンの【the Institute of Psycho-Analysis】の履修課程に1960年に導入され、第1年目の研修生を対象に必須の研修科目とされてまいりました。この論文で引用されました観察資料は、主としてそれら研修生の手掛けたものに拠っております。そもそも乳幼児観察は1948年【タヴィストック・クリニック (the Tavistock Clinic)】に児童サイコセラピストの養成コースが開設されて以来の研修科目であったわけですが、その後さらに我々は、非臨床 non-clinical の時期の第1年目の研修生にも乳幼児を経験する何らかの実験的試みを奨励してまいりました次第であります。

これは多くの理由からとても重要と考えられますが、主としてはおそらくそれが研修生たちにとって彼らが担当する子どもの患者がその乳幼児期に体験したことがらをそのまま生き生きと理解する上で大いに助けになるからであります。例えば2歳半の子どもの治療を始めたとして、その子の ‘赤ちゃんの感じ the feel of baby’、おそらくその名残りは充分まだ引きずられているでしょうし、そういった感触を掴めるわけであります。さらにそれは研修生にとって、話すことも遊ぶこともできない子どもの行動ばかりではなく、子ども全般の非言語的な行動そしてその遊戯についての理解にも精通してゆくものと考えられます。さらには、研修生が母親を面接し、子どもの生育歴についてあれこれ伺う際にもいっそうの理解を得やすくすることでありましょう。また、それぞれの研修生は子どもの発達を、その子どもの置かれた家庭環境で、そしてその身近な家族との関係性において、その誕生以来観察するというユニークな機会が与えられるわけですから、そこでそうした関係性がどのように生起し発展してゆくものかを自ずから会得してまいりましょう。それに加えて、研修生は週ごとのセミナーにおいて各自が観察したところのものを他の研修生のと比較検討出来ることにもなっているわけであります。

ここで、これまで何年にも亘って発展し続け、セミナーでも絶えず論議を重ねてまいりましたところの観察方法について振り返ってみましょう。児童のサイコセラピー・コースの研修生は週1回子どもが2歳に至るまでその家庭を訪問いたします。それぞれ毎回の観察時間はだいたい1時間程度になります。【the Institute】の研修生 the candidates の場合ですと、普通には1年目の終わりで観察は終了となります。我々が危惧したのは裏腹に、観察者を受け入れてくれる母親を捜すことには何ら問題はありませんでした。知人を介してやら、もしくは他の機関を介してといったふうでした。母親たちはしばしば明らかにもしくは暗にですが、誰かが定期的に自宅を訪れてきて、赤ちゃんのことを、その発達についてまた彼女が抱くところの折々の感慨をも聞いてくれる、そうした相手になってくれるのをとても歓迎していることを示しておりました。われわれはまず両親に簡単な説明をすることが肝要と考えます。すなわち観察者はプロフェッショナルとしての養成のために直接赤ちゃんを知る機会を得たいということであり、観察中にメモを取るのあまり適当ではないというのは直に分かったことでもあります。それは注意力を自由に泳がす free-floating ことを邪魔しますし、また母親の情緒的な要求に対してすばやく反応することにも妨げになると解ったからであります。

全体的な状況にかんがみ、観察者という役割の主要な問題性についてこれまでも多くの考察がされてまいりました。これには2つほど問題が含まれると思われれます。一つは観察者の役割といった概念の捉え方、それからもう一つ、観察者の意識的そして無意識的態度についてどう理解したらいいかといったこととなります。まず最初にその役割についてであります。乳幼児観察は、精神分析ならびに児童セラピーを教育する上の補助的な意味づけをそもそも目論むものでありまして、リサーチ的手段では毛頭ありません。重要なのは、観察者は家族とともにくつろいで居られて、そこでの情動的なインパクトを経験することなのであります。例えば助言を与えるやら、賛意とか不賛成を顔に表すなどといったふうに、何らかの役割を敢えて担うことがあってはならないわけでありまして。それでも或る何らかの状況次第では、たとえば赤ちゃんを抱っこするとか、もしくはちょっとした贈り物を手渡すといったことが禁じられているわけではありません。言い換えれば、観察者というのは、或る意味恩恵をいただき、だからこそ感謝の念を心に抱きながらの参加者、それ以上でも以下でもあり得ないということになりましょう。

しかしながら、次の2つ目の問題、観察者の態度というのはちょっと難しいものがあります。新生児を迎えた親御さんのご自宅において、観察者はどんなに赤ちゃんの経験があろうと、もしくは精神分析やら観察することの科学的モードなどを心得ているとしても、かなり強烈な情動的インパクトが醸しだされる状況に直面することになりましょう。そうしたことを万事観察し得るものにするためには、目の前の出来事からちょっと距離をとること(detachment)が肝要です。それも詰まりは、精神分析の基本的な方法にも似て、観察を可能にし得るところの自らの立ち位置を見極めることであります。すなわち家族のうちでどのようなことが起きているのかについてそのままを有りのままに見れるような立ち位置であります。そのためには何ごとか目の前で起きていることに専念しなくてはなりませんし、またそれとは別に何ごとかを敢えて拒まねばならないことにもなりましょう。どちらかという積極的に観察者自身の人柄を家族の‘新しい付加物的な存在’にさせるのではなく、むしろ両親、特に母親にですが、その彼女自身のやりかたに従い、ごく自然な流れの中で観察者が徐々に馴染んでいって受け入れられてゆくのがいいわけなのです。だが、強烈な幼児性転移、そしてさらには(そこからごく自然に惹き起されるころの)逆転移といった事態に引きずりこまれることには抵抗しなくてはならないでしょう。

ここで一つ例を挙げますと、家族のなかに年上の子どもがいるとしますと、観察者を母親と赤ちゃんのカップルに対しての同盟軍として独占したがるかも知れません。母親がかなり強い依存的な関係性を持ち込もうとするかも知れませんし、もしくは観察者自身が否応もなしに母親代理になるべく赤ちゃんに影響されることもありましょう。家族の他の人たち、祖父母、父親、親戚、友人、そうした彼らは皆どなたもが‘観察している’ということになりましょうが、彼らはその家族に多かれ少なかれ巻き込まれているわけで、もしも観察者がそれと同じように家族全体に巻き込まれたりすれば、その観察というのは、例えば父親もしくは母親が研修生で、自分自身の子どもの観察を持ってきたいと望むといった場合には客観性を期待するのは無理なわけで、事態はそれと同じようなことになりがちです。さらには、こうした状況の緊張感は大いに観察者の心に皺寄せとなります。詰まりのところ、殊に子どもの世話には自分が向いていないといったことで心に動揺を来すやら、家族全体の状況が醸し出すところの

謎々がひどく彼の興味をそそり、それがため頭を煩わせてしまうといったことです。彼は観察という行為において、そうしたフィーリングにすっぽりと覆い尽くされてしまうことがあってはならないのです。それらをよくよく吟味しますと、しばしばそれも家族の誰かからの投影 projection のせいであることが判明されます。大概のところ各自研修生が自らの分析 analysis の中でそうしたことに対処してゆかねばなりませんけれど、その一方セミナーでも、その観察された場に作用し、観察者自身の内的葛藤を激しく募らせている何らかの投影について幾らか説明してあげられることもありましょう。

こうしたセミナーのはたらきを例証するために、往々にしてよくあることでとても厄介極まりない問題を一つ私は話題として取り上げることがあります。すなわち母親の分娩後の抑うつ傾向であります。こうした傾向は概して世界的にも周知の事柄であり、その旨承知していたわけですが、それが観察者にとって及ぼす影響の度合いについては私にとって想定外でした。まず驚いたことには、セミナーの研修生たちが母親の赤ちゃんの扱いばかりに観察の目が奪われてしまうことでした。その態度は極端に批判的かつ情緒的なものでありました。最初私はそうした問題を和らげるために、母親ではなく赤ちゃんの方により注目するようにと彼らを促したのです。だがこの助言は大して役には立たなかったのです。私は、この点についてよりいっそうの配慮をせねばならぬと理解するに至ったというわけです。すなわち、母親の抑うつ感 (depression) とそれが赤ちゃんやら他の家族たちと同様に観察者に及ぼすインパクトということではありますが…。勿論、この論文において新生児の母親に垣間見られる抑うつ感について何か纏まった詳説を述べることは意図されてはいないわけですが、ここで観察的な報告に入る前に、私が‘抑うつ的 depressive’という言葉をどんな意味合いで用いているのかを詳しく語ってみようと思います。私としては、それを第一義的に描写的 descriptively には考えておりません。むしろメタ心理学的に考えているわけです。つまり母親は赤ちゃんとの関係性のそうした側面では、実に明確に‘部分対象の関係性’レベルに退行 regression しているという点を強調したいわけであります。母親は赤ちゃんに対して情動的なデタッチメント emotional detachment を経験しているということがはっきりと覗かれるでしょう。すなわち、母親は赤ちゃんに‘部分対象’である彼女の乳房、手、声を目一杯安心して使わせてあげ、それで赤ちゃんのニーズを理解し、かつそれに見合った応え方をすることがなんとも不可能なのであります。

ごく自然ながらも、母親の抑うつ傾向は観察者にとっても距離を保つこと(デタッチメント)を否応もなしに妨げることになりましょう。なぜならば、それは母親のニーズが観察者を取り込まんとすること、さらには観察者側の逆転移的不安がためであります。彼は、母親の生気をなんとか高めようとそちらの方向に気持ちが引っ張られるでしょうし、そして赤ちゃんの混乱し、また怒りに満ちた心の側面に同一化してそっちにも心が傾けられてゆくことは必至でありましょう。こうした母親の分娩後の抑うつ傾向の故に、観察者がその本来の機能すべき立場から逸れてしまい、情動的なストレス下に身を置くことになりかねないといった問題を例証するために、私はここで2つのタイプの異なる観察資料を提示してみたいと思います。一つは2ヶ月間の観察のまとめであり、もう一つはそれよりもっと詳細な観察ノートであります。それらのいずれにおいても観察者がそうした状況にどのように耐え、かつ踏みとどまったの

かが見て取れます。まず最初の事例ですが、母親のなかの躁的な傾向が躓き、それで心が押し潰され気味になったとき、観察者を敢えて‘依存対象’といった役割へと引っ張り込もうとする傾向が覗われました。

Kは、男子の赤ちゃんですが、若いご両親(25歳ほど)の第一子であります。彼ら二人はどちらもいっしょに事務所の管理人としての業務に携わっておりました。赤ちゃんは計画出産ではなく、結婚後2年を経て誕生した子どもです。観察が数ヶ月してから、母親としてもう大丈夫と感じられた頃ようやく彼女は観察者に打ち明けたのですが、学校にいたころ、クラスの他の女の子が結婚し子どもを持つことなどをお喋りしてるのを聞いていたとき、彼女は<(自分は)まあ結婚はいつかするかもしれないわ。でも絶対赤ちゃんなんて結構だわ。死なせてしまうに決まってるもの..>と内心想ったのだそうです。この母親はそもそも特別にヘルス・ビジターによって選ばれた一人なのでした。正常で、万事うまくやっているし、観察されることで心身に混乱を来たすことはなかろうということでした。彼女は、下痢やら頭痛やらがあつたにもかかわらず、出産予定日ぎりぎりまで仕事をしておりました。献身的ともいえるご主人に大事にされながら、それを頼りとしながらも..。彼女は出産を振り返り、いくらかせっかちとも言えた出産だったというふうに語っております。赤ちゃんの頭が出てきたかと思うと、<ビョンと飛び出してきたんですよ>というわけで、彼女にしてみれば内心ギョッギョツとし、大いに慌てふためいたんだそう..。このように、彼女は赤ちゃんの逞しさと自立性を強調するという態度を示し、それはこれ以降も一貫してそのまま維持されてゆきます。

最初の観察日、赤ちゃんは誕生後2日目でありました。母親と赤ちゃんとは周りを花やら贈り物そして新しい子育ての備品のあれこれに囲まれておりました。母親は晴れやかで、興奮した素振りではっきりなしにお喋りを止めません。赤ちゃんをどんなに誇りに思うか、赤ちゃんが男の子で、それもとつても元気そうなのがひどく嬉しいとか、贈り物をいっぱい貰ったことや、ご主人がどんなに尽くしてくれたかといったことへの感謝やらあれやこれや..。それと同時に、彼女は一日も早く仕事に復帰し、ご主人の手助けをしたいというわけでしたから、赤ちゃんのこともそうした都合に合わせてゆくつもりでいました。彼女はオッパイで授乳するつもりであることを繰り返し語っております。母乳にすれば赤ちゃんはひ弱な子どもには育たないだろうからといった信念に駆り立てられてのことでしたが、彼女は明らかに自分にそれをするだけの能力があるかどうか不安を覚えているようでした。

それから5日経て、全てがまるで違った趣きを呈しておりました。母親は寢床から起きてはいましたが、いかにも消耗したふうでひどく疲れた顔をしておりました。観察者の訪問を負担に思いながらも、敢えてはっきりなしにお喋りを続けます。彼女は、赤ちゃんを授乳したり、おしめを取り替えたりがどんなに手間隙の掛かるものか、つまりは彼を喜ばすことがどんなに大変かということをもろで考えてもいなかつたと語ります。彼女は乳首に水ぶくれ(blister)が出来てしまい、また脇下に痛みがあり、それでもなんとか6週間はオッパイで授乳を続けなきゃ..と語りました。

赤ちゃんは、乳母車のなかで眠っていましたが、泣き始めます。母親は彼をどう慰めていいか途方に暮れたふうでした。早口に観察者にあれこれ、赤ちゃんがどれほど遅いか、乳母車がどんなに綺麗か、それにちょっと過労気味だといった状況など話をしてゆきます。それからやつのことで彼女は赤ちゃんを仰向けにひっくり返し、〈おまえさんを甘やかしてはダメなのよ・・わかる？〉と語り掛けたのです。そして観察者に、彼ら夫婦は特別赤ちゃんを欲しいって思っていたわけではないのだけど、でも彼女も夫もとても喜んでいてということを話します。しかし、彼女は他の人の赤ちゃんをこれまで好いたことなど全然一度もないわけで、だから自分の子どもにどう接していいやらよく分からないのだとも言って、そして〈どうやらわたし、まずいことになってるみたいだわ・・〉と付け加えました。

これ以降も最初の頃の週では観察は似たり寄ったりと言えましょう。‘ギャンギャン騒ぎ立てる、お腹のすいた赤ちゃん wild ,hungry baby’、そのように母親は彼を呼んでいたわけですが、彼女はなんとか彼を満足させようと奮闘していたわけでありました。赤ちゃんは、オッパイに食らい付こうとしたり、逃れようとして、いずれの場合も力を込めて躍起でありました。口いっぱい‘乳首の黒い部分’を咥え込もうとするのですが、どうもうまくいきません。それに、オシメを取り替えられるとき、彼は身をよじり、落ち着きません。出産前クリニックで練習したお人形さんとは大違いというわけでありました。母親が乳母車のなかの彼をあやそうとします。そしてテーブルの上に彼を寝かせ、服を着替えさせもします。赤ちゃんが入浴後にお腹が空いたのか焦れて泣き叫んだとき、彼女はそれにはまるで眼もくれず、彼に服を着せながらお喋りを続けております。そして赤ちゃんが全然落ち着かず泣きやめないうちがあつたりしますと、時として彼女は観察者に彼を手渡して、押し付けもしました。それは彼女が何か別のことに取り掛かるためだったりということもありましたが、ただお喋りをしている間ですらもそうすることが間々あったのです。こうしてオッパイの授乳は6週間で終わりということになったわけです。

父親は、母親に十分なサポートを与えているように見受けられました。彼は時折赤ちゃんの声を真似て、穏やかながらも母親に対する批判を表明することがあつたり、もしくは彼女に向けての赤ちゃんのフィードバックをそんなふうを示したりもしました。彼は母親としての彼女の役割に対して競うといったふうではありません。彼は彼女を全然問題としては見ていないようで、彼女の抱える不安感にもかかわらず、赤ちゃんに関してはまるで熟練者といったふうに思い込んでいたみたいでした。それでも彼の手が空いてるときはいつも彼女の手助けとなっていました。母親は徐々に赤ちゃんに対して親しみを抱き、許容的にもなってきましたから、このような父親の協力的な態度が、おそらくそうした改善が母親にもたらされた重要な要因であったものと思われます。この観察資料においては、未熟で依存的な母親の躁的防衛 (manic defences) が崩れ、赤ちゃんの世話をすることの大きな不安感、さらには自分にそうした能力があるかどうかの自己不信を募らせてゆく様子が覗われましょう。

この赤ちゃんの母親が適性を欠いている inadequacy ののではないかといった観察者の懸念についてですが、赤ちゃんがぐずったり泣き喚いている間にもひっきりなしに母親はお喋りを続けているといったふうに、どうやら彼女の側に我慢の無さが覗われますし、母親の赤ちゃんに対して温かみや思い遣りに

欠けていることもそうですし、彼女が父親のサポートに安心して頼りきっていることやらにも覗かれることから、そうした印象は確かにあるともいえましょう。セミナーではまた、母親と観察者との間に関係性が継続されてゆくにつれ、有益ともいえる進展の兆しを感じたのであります。例えば、母親が観察者に、青年期において彼女がそもそも母親になれるものかどうか不安を抱くことがあったと打ち明けたわけですが、そうした事実がまさにそうだとと言えます。

さて、ここで次の2番目の事例をご紹介します。その観察の最初の記録です。そこには私がこれまで述べてきたように、母親の抑うつ感が観察者に及ぼすインパクトについて書き綴られており、また観察のデータが実に豊富であります。その中の或点についてはいずれ後で触れたいと思っております。

チャールズ

チャールズは、最初の観察では誕生後10日目でありました。専門職のご夫婦の2番目の子どもであります。レポートから下記のとおり抜粋して観察されたものを引用いたします。

私は母親に電話し、ご紹介をいただいていた件で改めてこちらの申し入れをお伝えしました。そして翌日には訪問することになり、お会いし、それでお互いうまくやってゆけるかどうかを確認し、そして観察のための今後の手筈を決めることができるかどうか話し合うことになりました。この時間の打ち合わせの際に、母親は私に、赤ちゃんが目覚めているときがいいのか、それは全然問題ないのかと尋ねました。私がどちらといえば赤ちゃんが起きているときの方がいいですと答えると、彼女はくでは授乳しているときがいいわね>と言いましたので、私はそれにすぐさま同意しました。彼女はとても快く私の方の都合を考慮に入れてくださり、授乳時間をいつもより30分早めにするふうにしてくださいました。そこで私は、<いつものとおりで結構ですよ>と言ったわけでした。

母親は、年齢は25歳ほどで、眼鏡をかけており、ふっくらした明るめの茶褐色のショートヘアでした。四角張った、男性的な頭と顔付きで、その顔の表情も声音ももの静かで生真面目な印象であり、でも微笑してくださるときはとても温かみのある顔になります。彼女はSwedish-Livertyの縞模様のブラウスを着ていて、長めの黒いスカートを穿いておりました。いくらか全体にちょっとみずぼらしいといった風情がありました。でもそれはそれで魅力的でなくもありません。彼女は毅然とした物腰ではありましたが、明らかに私にどう対処したものかと些か不安げにも見えました。

私はまず最初に裏庭へと導かれました。そこには母親の母親が毛布にくるまったチャールズを腕に抱えておりました。母親は、そろそろオツパイの時間よねと赤ちゃんに語りかけ、私にご覧になられますかと問い、そこで私は母親とチャールズとの後に従い、居間へと入ります。母親は最初、壁際のソファに腰を掛けます。そして私に肘掛椅子を彼女の向かいに持ってきて座るようにと促しました。それから彼女は私と位置を変えました。なぜならそのソファには庭(そして祖母)につづく扉からすきま風が吹いていたからです。座る位置を変えたことで、彼女にもはやすきま風は吹いてきませんから、

扉は開け放したままにしておけるということになります。それはまた、母親の姿が庭にいる彼女の母親の方から始終見守られているということを意味していました。一方、ソファに私は座ったわけですが、その位置からは母親と子どもが私にはよく見えなかったのであります。

私が最初にチャールズを目にしたとき、彼は祖母の膝の上で大きめの毛布にすっぽりと包まっておりました。毛布がちょっと後ろへと引っ張られますと、彼は左手を耳に当てる恰好で仰向きになっていて、右手は顔全体の前の方を覆っていて、頬やら口そして鼻をしきりに擦っているようすが覗われました。彼の右手の親指は彼の口に咥えられておりました。頬そして頬骨に何箇所かひっかき傷があり、右目はいくらかすかに変色しておりました。まるでそこが指で強く押し付けられたみたいでした。母親とチャールズが肘掛椅子に落ち着いて、授乳が始められます。私の位置からは彼の様子はほとんど見る事が出来ません。私は彼の名前そして年齢を尋ねます。母親は私の仕事について尋ねました。私はいつか将来児童を専門とした仕事に就きたいと思っていると説明しました。われわれは私が今後訪問するのにどんな時間帯がいいかを話し合います。母親は授乳よりもむしろ入浴するときの赤ちゃんを見に来てもらうのがいいと思ったようでした。これは、しかしながら、私の誤解でした。どうにか適当な時間が見つかり、そして今後もチャールズの日々のタイムテーブルが変わることもあるでしょうから、そうした折々の事情に応じて臨機応変にしていまいましようとい互いに同意し、そうして成り行きを見守ることになったわけでありました。母親は、食卓附近に段ボール箱が置かれてあったのを指差しながら、家の中が全然片付いていなくて、見苦しいさまであることを気遣い、ごめんなさいねと言います。私はそれに応えて、＜何でもありませんよ。食べるものには何ら支障はありませんでしょうから＞と言いつつ添えますと、＜そう、大丈夫なの。母が来てくれますからね！＞と返答します。ここで長い沈黙が続き、対話が途切れます。それから彼女は、私の自宅の電話番号を控えさせてくださるかしらと尋ねます。

母親は自分の手首から外した腕時計で授乳の時間を測っていました。彼女がチャールズの口から乳首を抜き取り、左腕の肩に彼を抱えると、時計が彼女の膝から落ちましたので、私がそれを拾ってあげました。彼女は彼の背中をしっかりととんとんと叩きます。それほど強くではありません。そして彼はすぐにもゲップをしました。そして彼は直ちに声を上げ、どンドン怒りの唸り声をあげてゆきます。母親が彼に話し掛けても静まりません。そして彼女が彼に右のおっぱいを与えようとしますと、彼は乳首を口で捕らえようと幾度か試みます。そうしながらも、このとき彼はキスするような音を立てました。母親はついに手で乳首を彼の口のなかへと咥えさせてやります。すると彼は吸い始めます。このとき私は彼の様子を目で捉えることができたのですが、とても穏やかにゆっくりとお乳を吸っていたように覗われました。吸いながらも、彼のからだ全体は何ら動きのないままで、じっとしておりました。

彼が吸い始めたとき、その右腕で乳首のちょうど真上の辺りを軽く撫でておりました。彼の手は口の動きを邪魔しているかのようでありました（言うなれば、乳首に手が凭れかかっていたわけです）。それで母親は再度彼のその手を退けたことになります。そこでようやくのこと、彼はその手を口の辺りに

トランペットの形みたいにして軽く丸めて落ち着かせたわけでした。彼の足はまったく動きがありません。ただ一度だけですが、彼は一方の足で近くにあった椅子にこすりつけるような微かな動きをしたのを認めました。母親がくほらほら、しっかり頑張って飲まなきゃね (Come on, work) と穏やかに諭します。どこかあらあら仕方がないわねと諦めたかのような口振りで・・・。

しばらくしてから母親はチャールズをオッパイから離します。彼はとつても眠たそうです。そしてまずは彼を自分に向かい合わせとなるように膝の上に立たせて抱えます。スポック博士が、ゲップをさせるのに肩に赤ちゃんを抱き寄せるようにする前にはこんなふうにするのがいいと言っていたという話をします。しかしこれって全然効果がないということ、誰もがどうやらそんなふうだということを語ります。私はそれに同意し、実は私の息子の場合もそうで、彼にゲップをさせてみた経験がそうであったと伝えますと、彼女は私に彼は幾つかと尋ねます。それからジャックのことになり、つまりチャールズの上の子ですが、19ヶ月になると語りました。

母親はチャールズを肩に凭れかからせます。とても眠たげでからだがだらんと寄りかかり、それはいかにも充分にお乳を飲み足りたといった風情でありました。ここで彼がゲップをしたかどうかについては記憶がありません。

彼女はそれからもう一度彼を抱き直して右のオッパイを与えます。すると彼はしばらくの間、いっそうのことゆっくりとしたリズムで吸っておりました。彼女はそれからチャールズを肩に凭れかからせて抱っこをし、2階へとオシメを替えに上がってゆきます。私はその後ろから付いてゆきました。この時点でチャールズの顔はごくごく穏やかであり、どこか頬を膨らませていましたものの、でも実際なんという表情もそこには見て取ることは出来ません。彼は眠っているというよりもどこかボオツとした状態でいたように思われます。音は全然立てることはありません。

われわれは、母親そしてチャールズと一緒に寝ている小部屋に入りました。ベッドはきちんと片付いてはおらず、チョコレートの包紙があちこちに散乱しているといった具合でした。母親はベッドの上に毛布を敷き、そこにチャールズを仰向けに寝かせます。するとこの瞬間に彼はすばやく目を覚まして、カナキリ声をあげます。彼女は新しいオシメを取りに部屋を出てゆきます。彼はカナキリ声を上げたままです。その両方の腕は絶えず顔の辺りをまるく輪を描いておられます。突き上げたり顔にぶつけたりこすったりなどの動作をしながら・・・。足もまた同じような動きをしており、左足を右足に当ててぶつけるようにしていました。

このカナキリ声は、母親が別の部屋から彼に向けて声掛けしました途端に止みます。そしてちょっとの間、機嫌のいいウクウクといった低い音を奏でます。それからまたカナキリ声をあげ、母親が戻ってきて、そしてオシメを替えながら、いかにも分かっているわよといったふうに彼をあやしてやるまで止みませんでした。オシメ交換の間、彼は惨めっぽくグズグズと泣いておりました。しかし母親に語りかけて

もらう声の響きを打ち消すほどではありません。彼は両腕を顔の周りで振り回しておりました。彼の左腕は眼前に振り上げられて、あっちこっち空を撫でさるかのような動作をしておりました。それは盲人の男のしぐさを私に想起させます。

母親は彼の性器の辺りやらお腹にもお粉をたつぷりめに付けてやります。お尻の発疹に私の注意を促し、ご近所にいる赤ちゃんたちは大概こうした発疹がお尻にあるということを話します。オシメ替えが終わった後、彼女は彼をコットの中に左側の背を下にして寝かせました。毛布で彼のからだを包み、手はそこから出したままであります。彼女はそれから眠っているジャックを起こしに部屋を去ります。これからお散歩に出掛けるんだそうです。

チャールズは口に左手の親指を咥えて仰向けになっておりました。左手の指が顔を覆っており、殊に右目の辺りです(左目はシーツに沈んでいました)。彼の右の手はこめかみの辺りで曲げられております。せわしく鼻息を荒くして、呼吸をし続けております。それも不規則に時々なのであります。それから彼の左手はトランペット風のかたちを取ります。それは授乳されていたときに彼の右手がしたのとそっくりでした。彼の顔はほとんどといっていいぐらい何ら動きはありません。突如として大きな波打った溜め息が起こり、彼はまったくのところ脱力してリラックスできたふうでした。彼の呼吸はもはや何ら音を立てることはありません。彼の両手は幾らか顔からずれたところにあります。次の数分の間、彼は少しばかり前のめりからからだをグイと持ち上げるような動作を何度かしました。腕はまっすぐに伸ばされ、それはまるで落下するみたいで、それで誰かにぐいと掴みかかったといった感じでした。これは時として外界の刺激(母親が隣の部屋でジャックに話し掛けている声が聞えたり、扉がバンと閉まる音がしたり)への反応として起こるようでもあり、そして時には私が認めることのできる外界の刺激など一切何も無いときでも起こりました。

ようやくのこと彼は静かに眠りに就きました。2、3回彼はジャックの部屋から聞える騒音にちょっと目を覚まされることがあり、そして顔をクシャとさせて泣き始めるのですが、やがて再び眠りに落ちるのでした。母親がやってきて、彼に上着を着せてお帽子を被せます。彼は泣き始め、母親は彼にととても思い遣りに満ちたふうに話し掛けておりました。彼はまた眠りに就きます。そして下の階へと運ばれて、乳母車の上に敷くマットレスの上に横にされました。母親と祖母がいっしょにお散歩に出掛けるのにあれこれ必要な物を準備している間、彼はマットレスの上に仰向けでいたのですが、その表情に私は一瞬ギョッとしました。それまでとは全然違ったふうに変っていたのです。今や強烈なひどい苦痛に耐えているかのような顔付きになっています。そしてそのまま、私がそれを最初に認め、それから家の外でサヨナラを彼らに言うまでの2、3分の間、筋肉はまるでピクツともいたしません。強張ったままなのであります。

私がこうしてここはかなり詳細を極めた観察資料を提示したのは、観察者がその観察時に実際どのようなのか、またそのような経験がどのようなインパクトを彼に及ぼすかを示すことにあります。

さらには、この赤ちゃんを一応見知っておいて欲しいわけなのです。というのは、後に彼については他の観察資料に関連してこの論文中で論議したいことがらがあるからであります。

もし我々が、これら資料から観察者にこうした経験がいかなる影響を及ぼすかという点を考察するとしますなら、我々はごく自然にこれがこの家族との最初の出会いであったことを考慮に入れねばなりません。観察者は、母親が彼にどのように対応すべきか些か不安を覚えているらしいことを書いています。その行間において、観察者の緊張感も覗われます。彼は、庭にいる祖母に母親が我が子を授乳している姿を眺めてもらえるように、彼と座る場所を変え、そのお蔭で彼には授乳中の母子がよく見えないことになってしまっていたということについて書き記しています。彼の繊細さ sensitivity はその記録の中で、母親が彼を招待する際に‘低い声で何やら呟いた’というふうに書き留めている点やら、それからさらには彼女が訪問時間を約束するのにおそらく授乳している姿を彼に見られたくないようだとして捉えたという点にも覗われます。母親から室内が取り散らかってるさまについて謝罪があった際、殊に食卓附近だが、彼は(辺りが片付いていなくても)食べ物のお味にはおそらく何ら支障はないでしょうと言ったとき、母親は<今、母親が来てくれていますから、もう大丈夫ですわ>と答えました。ここに我々は母親の抑うつ感と彼女自身の母親に対する依存性との最初の兆候を見て取ることが出来ましょう。そしてそれに絡めて観察者側の彼女を慰撫する comforting 試みもであります。<長い沈黙があり、対話が途切れた。それから母親は電話番号を頂戴してよろしいですかと尋ねた>ということがありました。ここに2つの関係性が同時進行していることは明らかであります。赤ちゃんとおっぱい、母親と観察者、それぞれ別々ながらも…。観察者の母親の抑うつ感への共感 sympathy が再び頭をもたげます。2番目のおっぱいを与え、それにいくらかグズグズと手間取ったため、母親がチャールズに<ほらほら、しっかり頑張って飲まなきゃ(Come on, work)>と語り掛けたときであります。観察者は彼女がそれを‘穏やかだが、仕方ないわねとどこか諦めているような口振りで’言ったと書き記しております。

観察者は赤ちゃんの引っ掻き傷のある顔を哀れに思い、そして後には母親が寝ていた上のお兄ちゃんを起こしに行ってしまったとき、そのお蔭で置き去りにされてしまったといった赤ちゃんの感情にも同一化して、それぞれの思いを書き綴っております。顔の引っ掻き傷がどうして出来たのかの謎は、後で彼の両手が絶えず顔の辺りをまさぐって、突いたりこするやらして傷をつけたのだということが判明されてまいります。彼の足もまた同様の動きをしていました。それらは母親が部屋の外へと居なくなっている間中に起きていたのであります。

オムツ換えが終わったあと、赤ちゃんは寝入ったように見られます。この間観察者によってその詳細が事細かに描写されております、しかし別れる際に、彼はチャールズの顔に浮かんだ表情に驚愕を覚えたのであります。赤ちゃんは眠ってたにもかかわらず、まるで強烈な苦痛に喘いでいるかのような顔付きに変わっていたというわけです。こうした緊張の強いられる事態に遭遇し、第一回目の赤ちゃん観察であってもここまで詳細を書き記し報告できたということはなかなか得難く思われます。

このような論文の体裁では、セミナーがこうした観察をどのように活用してゆくのかについてどこまでお伝えできますやら、問題がありましょ。実に私としてはごく限定的にしか申し上げられないわけでありま。もしも精確を期するとすれば、観察資料と同じぐらいに逐一セミナーでの討議を報告する必要があるでしょう。それですら誤った印象を与えかねません。なぜならば演繹されたものというのは、必然的にそれ以前の観察および討議に依るわけでありま。つまりは観察の回数が重ねられるなかでそれらシリーズが繋げられてゆき、徐々にゆっくりとその行動のパターンが浮き彫りにされてゆくということではないからでありま。ここで私が強調しておきたいと思う点は、それぞれ個々の母子カップルについて継続して観察することの重要性でありま。セミナーでの経験から申しまして、或る一つの観察において一見して‘パターン’と思われるものが浮き彫りになってきているように見えたとしても、それが同じ、もしくはそれに似た状況においてさらにその後の観察の中で何度も繰り返される場合に限って意義あるものとして認められていいことになるわけなのです。そこそこかなりの期間そうした観察し得るものの詳細に全神経を傾注してまいりますと、研修生にとって‘パターン’を見極めるだけではなく、その‘パターン’がどう変化してゆくかを見定める機会をも与えられることになりま。観察者は、母子カップルが互いに馴化し、適応し合うといった変化やら、そして彼らの関係性において深い感銘を覚えるような成長および発達への能力をもやがて認知してゆくことになりましょ。すなわち、満足的ともいえるような母親と赤ちゃんとの関係性に伴うところの互いが互いを活用し合い、発達してゆく能力と柔軟性でありま。セミナーにもたらされる興奮について敢えて申しますと、次なる展開について見通しが見えてくること looking forward、そしてそれと同じぐらいに振り返り searching backward がまさにそうでありま。

ここでそのような行動のパターンと見られる事例を2つ、同じ赤ちゃんチャールズから見てください。

最初の観察で、観察者は、赤ちゃんが2つ目のオッパイで授乳されるときに困難を語っています。その吸い方が遅く、グズグズと時間が掛かり、母親がしっかり頑張って飲んでないわねと言ったということでありま。それでも授乳は続けられたわけですが…。後の観察で、実にどうやらこれは彼が2つ目のオッパイに1つ目とは違ったふうに関わる‘パターン’であることがわれわれの眼に見えてき始めたのでありま。最初のオッパイでは、彼は勢いを込めて力強くぐくぐくと飲んでおりま。時にはただぐくぐくと…。ところが2つ目のオッパイでは彼はとても穏やかに吸うわけです。彼の唇の動きはほとんど認められないほどでありま。母親は或る時、赤ちゃんがいつもながら最初のオッパイではしっかりと飲んでいるようなのだが、2つ目のオッパイはどうやら‘もてあそんでいる’みたいだと、そんなふうにご語っております。しかしながら、彼女はなんとかそれに耐え、赤ちゃんを抱きかかえ直してからまた授乳を試みたのでありま。＜充分にお乳を飲んでないと、必要なだけの時間眠れないことになるから…＞ということでありま。2つ目のオッパイを吸いながらも、チャールズは自分の手でいろんな動作をしております。軽く叩くやら、トランペットの形を作ったり、母親のセーターをさすったり、撫で回したり…。

このように幾週間にも亘っての観察から、チャールズが2つのオッパイに関わる彼なりのやり方に或る種の‘パターン’を認めたわけでありま。しかしながらそれも、この後にさらなる手の動作に纏わる補足

的な観察資料に関連させてゆくことで、どうやらそれらには何らかの繋がりや関連性があるということを知り得たわけであります。それはいずれ後で述べることにいたしましょう。

2回目の観察において入浴が観察された際に、もう1つ別の‘パターン’が浮上してまいりました。チャールズはオシメが外された途端に泣き出します。しかも彼の泣き声は着ていた服が脱がされるやいっそうひどくなりました。母親が彼を抱き上げて、お湯の中でからだを洗ってやり、石鹸を付けてやるなどして彼にやさしく声を掛けてやりますと、その泣き声も次第に弱々しげになっていきました。やがてシートの上に寝かせられると、彼の泣き声はたちまち激しさを増します。だが服をもう一度着せられますと、泣き声は直ちに止みます。彼はリラックスして周りを見渡しております。入浴中やら、もしくはその後に横にされるといった具合に裸で外気に晒される際にこのように激しく泣くといったパターンは毎回の観察で繰り返されたことであります。それは生後2ヶ月目の終わりまで続きました。彼は母親の話し掛けや手でケアされたりするといくらかは慰められるようでしたが、からだを包まれるとき、例えばパジャマを着せられたりとか、もしくはコットの中で毛布で覆われたりしますと、直ちに静まったのであります。

前述しましたところの‘パターン’においては、内的心理の防衛機能のはたらいていることが示唆されているとも見られます一方で、母子の間でのコミュニケーションの‘パターン’がまた観察されるようにも覗われます。そこにはWinnicottの言うところの‘holding’の母親の基本的役割、もしくはBionのいうところの‘containing projections (コンテインするための投影)’が観察されるのであります。

或る固有なる母親と子どもの間において或る種の選択されたともいえるようなコミュニケーションのありようが互いの関係づけのなかで主要となってゆく様子が明らかになってまいります。そうした選択がそもそも果たして母親の好み preference に起因するのやら、それとも赤ちゃんの方なのか、そのいずれかを判別するのは難しいわけであります。ここで2つの事例を挙げてみることにいたしましょう。

或る母親、Mrs. Aと呼ぶことにしますが、彼女は授乳状況において何やら今ひとつくつろげません。彼女は赤ちゃんをととても何だかとても変なふうに抱っこしています。見るからに緊張で強張っており、自分のからだに赤ちゃんをピタッとくっ付けることにどうも不安を覚えるふうでした。これはこの論文で最初に紹介した母親にも似ているわけですが、彼女も、赤ん坊との密着した身体的接触に我慢できなかつたということになります。Mrs. Aは、授乳が終わるともうやれやれと気持ちが俄然すっきりするとのことであります。彼女は赤ちゃんを床の上にゆったりとした恰好で横にさせるか、もしくは膝の上に自分のからだからはちょっと遠ざける恰好で両腕に抱いておりました。彼女は赤ちゃんを見つめながら、唇で動きを試みさせます(口を開けたり閉じたり・・)。すると赤ちゃんは同じような仕草をしてそれを真似ました。もしくは彼女が赤ちゃんに話し掛けると、赤ちゃんもそれに応えて何かしらバアバアと音を発したりするのでした。或る日のこと、赤ちゃんが5ヶ月目の頃でしたが、母親は急な用事を思いつき買い物に行つてこなくてはならないということになり、観察者に赤ちゃんを預けたことがありました。その際あれこれ指示をも残して彼女は出かけてしまったわけですが、そこで観察者は赤ちゃんを膝の上に抱えて座ってお

りました。赤ちゃんは後ろ向きに座らせられている限り、静かにしていられたのです。ところが観察者が赤ちゃんに話し掛けたり、自分の方からだの向きを換えて顔を見せようとしたりしますと、赤ちゃんは泣き始めるのです。このことは何度となく繰り返し起こったのであります。セミナーで論議されましたことというのは、どうやらこの赤ちゃんにとって母親との心地いい交わりが連想されるのは圧倒的に視覚的 visual かつ声音 vocal のようだということでした。観察者の声そして見掛けは確かに母親とは違うわけで、それに気づいたことで赤ちゃんは泣いたのであります。観察者がふと気づいたことがあります。それは、赤ちゃんが彼の膝の上で静かに座りながらも、その目は母親が出掛ける一寸前まで居たところの部屋の隅に釘付けになっていたことでもあります。それはまるで母親に関連づけられる場所を凝視し続けることでどうやら慰めを見出しているかのようでありました。その一方で、観察者の声と見掛けは、母親がそこには居ないということの証拠ともなり、それで赤ちゃんは泣いたのでしょう。

さて、ここでもう一つ、上記された事例と比較すると面白いと思われる事例を挙げてみましょう。その赤ちゃんは母親との交わりにおいてはどうやら何よりも運動感覚性 kinaesthetic のパターンが際立つるように覗われます。

ジェームス

観察は、ジェームスが誕生後4週半目になったときに始められました。母親が彼の衣類を脱がせて入浴の準備をしているところでした。彼女が彼を仰向けにしますと、彼はオッパイに手を届かせようとして差し出します。そして抗議するかのような声を上げます。母親は始終彼に話し掛けています。＜イヤだっていうわけ？ そうだね。でも、まあまあ、いい子だからね。気にしないの。すぐにもお湯の中だからね・・＞と言います。彼女は観察者に向かって、実際のところ彼はお湯に入るのが大好きなのよと言います。他の子どもたちとは違うとのことでした。彼らは赤ちゃんの頃まるでお風呂を嫌っていたわけで・・。彼はお湯の中に浸かり、静かに横たわり、膝をお腹の上へと持ち上げました。何ら音も立てず黙ったままでもかにも満足げでありました。後の観察で、彼は入浴中に水を撥ねたり、足蹴りしたり、遊んだりしております。そしていざお湯から出されるときには、最初の観察時にそうだったように、抗議の声を上げるのです。それから母親が抱っこして胸に寄せると、彼は直ちに乳首に引き込まれ、力強く吸い始めました。彼は目を開けており、右手でオッパイやら母親が着ていた服のボタンやらを交互に触ります。こうした母親の身体に触ることは、赤ちゃんの身近に母親が寄り添っているときはいつでも決まってやる‘パターン’だということが観察されております。13週目で、母親は入浴の支度をしに部屋の外へ出ている間に、観察者に赤ちゃんを預けます。＜さあ、おばちゃんのとこに行ってらっしゃい。あなたのことをお勉強してるんですってよ・・＞と語りかけながら・・。ジェームズは観察者の膝の上で横たわっておりましたが、手を伸ばして触ろうとはしません。母親が部屋に戻ってきたとき、彼は彼女を認め、抱っこしてもらうまでその姿をずうっと目で追っておりました。彼女の膝の上に座りながらも、彼はどうやらオッパイを口と手で感じていたようでありました。そして後に彼は手を伸ばし、彼女の腕を掴みました。入浴を済ませて、オッパイを与えられたとき、彼はオッパイをぐいと手に掴み取りました。母親は彼の手を退けてやります。すると彼は、それから手を母親の手の上に置き、お乳を吸いながらも、その手をリズムカルに動か

しておりました。22週目に、彼はオッパイを大きく手を撫で回しております。さらに‘24週目’には下記のとおりです(研修生の観察記録をここに引用いたしましょう)：

ジェームスは意欲的にオッパイに吸い付きます。母親は、<もうそろそろ授乳も終わりだわ。お乳がもう直に出なくなってゆくみたい・・・>と言いました。ジェームスは左手で母親のオッパイをいじくっていましたが、それから母親の手へと移り、その手をもてあそんでおりました。彼の手の動きはオッパイを吸いながらもその間ずうっととても活発でありました。私が彼を眺めているとき、ふと彼の動きは意識的に母親を撫で撫でしてるのかも知れないといったふう感じられました。どうも私には彼が自分の手が何をしているのか十分に自覚しているのではないかといったふうに思えたわけです。母親はジェームスを2つ目のオッパイへと換えますと、彼は意欲的にそれを捉え、彼女のオッパイやら、首を撫で回し、彼女の口元にも触れました。実際にはこれまで私が見たところでは彼がそうするのは普段ですと最初のオッパイを吸っているときだけなのですが・・・彼は27週目で哺乳瓶へと切り替えられました。この後1週間ほど彼は落ち着かず苛立っており、授乳を拒み、ミルクを口いっぱいを含みながらもとうとうと傾眠しがちでありました。その一方で、夜はひどく寝つきが悪くということでありました。母親は、彼がまるで小さな赤ちゃんに戻っちゃったみたいなのよと言いました。その翌週、彼は哺乳瓶に触れようとし始めました。それからそれに手を伸ばし、いかにもいとおしげに撫で回しました。かつてオッパイにしたようにです。それから徐々に落ち着いて、片方の手で哺乳瓶をしっかりと抱え、もう片方の手は母親を撫でたり、さすったりしたのであります。

勿論、ここで私は、ざっと見渡したところで目にした‘パターン’—実に大筋の傾向—を描写しておりますわけです。他にもそれに付随してもっとあれやこれや語ればキリがないほどなのですが、省くしかありません。残念ながらそれらすべて詳しく語る紙面上の余裕がないからです。そういうわけですが、この観察資料から、セミナーでの我々は、この赤ちゃんがオッパイとも母親とも関係性がとても親しげなものであり、密な触れ合いがあり、そして彼は彼女に対して怒りとともに愛情を表出しているということ、それも主として彼女のからだに触れることで・・・といったことを知り得たわけなのであります。母親は彼女自身とてもよく声を使う人でありましたが、赤ちゃんはどちらかといえば寡黙ともいえますし、むしろ触感的 tactile および運動感覚的 kinaesthetic な関係づけやコミュニケーションをより好むらしいことが認められます。

ここで最後に一つ述べておきたいことがあります。それは、赤ちゃん観察とは或る側面において科学的データを集めることであり、かつそれらについて思考することのトレーニングでもあるという点であります。セミナーでは、当初からそもそも‘観察する’とはいかに困難なことか、それは明白でありました。すなわち解釈せずに、ただ見たままを見たとおりにその事実を収集してゆくということなのですが・・・これらの事実はそれが言語化された途端に、どの言葉もその含みにおいて曖昧さの陰りを帯びたものとして感じられることとなります。研修生の述べていることとははたして乳首を赤ちゃんが口から‘落とした’のか、それとも‘落ちた’ということか、‘押し出した’のか、‘抜けた’、もしくは‘外れた’のかといったふうに・・・

事実、観察者は絶えず何らかの言葉を選択しているということに気づかされます。なぜなら観察とは思考とほとんど切り離せないものだからです。これはとても重要なレッスンです。何故なら、見たものについて確証を得んとするためには、なによりも慎重であること、そして引き続きさらなる観察に依拠してゆかねばならないことを教えてくれるわけであります。

またわれわれが理解しましたところでは、研修生は、理論に飛びつく前にじっくりと目の前の事象を見据えそして感じ取ることを学んでゆくようですし、そして母親がどのように赤ちゃんをケアし、やがて何らかの収まりどころを掴んでゆくの辛抱強く見守ってゆくことを学んでまいります。このようにして、研修生は徐々に時間を掛けてゆつりと子育ての善悪といった固定観念を捨て、一般に広く受け入れられている子育てのプリンスプルについてもよりいっそう柔軟になってゆくことでありましょう。そうしてやがて彼らの中で芽生えてゆく感慨があるとすれば、それはそれぞれの母子がユニークだということであります。すなわち、赤ちゃんというのはいかにそれ自らのペースで伸びて成長してゆくものか、そして母親に対してもいかにそれ固有のありようで関係づけをしてゆくものかといったことでもあります。

おそらくセミナーでもっとも興奮を呼ぶものがあるとしたら、観察が回数を重ねるなかで、それら観察資料から子どもの行動に何らかの筋道 threads らしきものが見えてくるということであります。それは殊更にその子どもがそんなふうに対象関係 object relations を経験しているといった観点からとても意義あるものと見做されます。或る事柄が何かしら意味のあるものとしてその輪郭を表し始めるさまはグループの参加者たちを大いに驚かせます。それから早期の事実がその記録を遡り見直されることが可能ですので、そんなふうには仮説やら予測がその後継続された観察において確証を得るといったことがあるわけなのです。例えば、ここで改めて赤ちゃんチャールズの10日目、その最初の観察に戻ってみましょう。彼はお乳を穏やかにゆつりと吸いながらも、2つ目の右のオッパイを撫で、口の周りに手でトランペットの形を作っていたということが記録されておりました。後にベッドの上にひとり横にされておるとき、彼の右手は頻りに彼の眼やこめかみの辺りを探り、一方で彼の左の親指は彼の口の中に咥えられておりました。それから徐々に彼の左手はトランペットの形になり、そして直ちに寝入ってしまったということでありました。

手の動作は彼の対象そして彼のからだとの接触において重要なモードであるという事実はここでごく一般的な意味でも明瞭と思われれます。だが、それも9～10週目において観察がなされるまでは大して特別な関心を引くことではなかったわけです。観察者は9週目を下記のとおり報告しております。

いつもの授乳が変わったこともあり、それがため少々混乱を来たしたようでしたが、チャールズは自分の手でなにやら複雑な動きをして遊んでおりました。最初に片方の手でもう片方をぐいと引っ張り、押し潰さんばかりなものでした。それで指、それから親指をもきつく折り曲げんとしているようなのです。時折片方の手が口の辺りに小さな輪を描きます。その一方で彼の顔にはなにやら不機嫌そうな、不満足な表情が浮かびます。いささか顔が歪んでおりました。この後で、一つの変化が到来します。

彼は格段に落ち着きを増し、そして自分の手をいかにも遊んでいるかのように、動かし始めたのです。両手を合わせたり、こすったり、指を互い違いに突っ込んだり・・・右のオッパイに抱かれますと、彼は規則的に吸っておりました。彼の手はどちらのオッパイの場合でも乳首から少し離れて置かれておりました。母親は、彼がしばしばオッパイを吸いながらも、それに手で触ったり、撫で撫でしたり、きつく小突いたりをもするという話を語っております。

10 週目；

母親がその手を彼の胸の辺りに置きますと、彼は彼女の指で遊び始めます。彼自身の指を丸く曲げた恰好で彼女の指に絡ませ、そして穏やかに彼のひとさし指を彼女の腕やら手をなぞって描いてゆきます。彼はまた彼女の顔を見つめており、彼女の話し掛けに反応してご機嫌よく喃語をあれこれ呟いておられます。これに先立って、左側(最初の)オッパイを彼は力強く規則的な息遣いで飲んでいましたが、その右手は母親の胸の真ん中辺りに高く伸ばして、そこにもたれさせておりました。それから彼はそこで吸うのを小休止し、それから改めて吸い始めました。吸うのを休んでいる間、彼の右手はいかにもぎゅっと手を握りしめた恰好になり、そのこぶしをきつく握ったままでおりました。後に右側のオッパイになりますと、彼はそれほど規則的には飲みません。彼は両手をそれぞれ乳首に近いところに置き、穏やかにその指をオッパイの上でもぞもぞ動かしておりました。ときおり彼は一時的に両手をいっしょに合わせることもしております。

これ以降、或る一定のはっきりとした‘パターン’が観察されるようになりました。彼は右側(2番目)のオッパイを吸っているとき、穏やかな動きでもってオッパイに触るやら撫で撫でたりをしております。しかし左側のオッパイを吸っているときは、彼の手は母親の胸のあたりに置かれるか、指が時折硬く握りしめられるか、もしくは両腕がそれぞれのオッパイの上に置かれ、まるで動きが止まりじっとしたままなのでした。

このように彼の両手が互いに関わり合うその動きに我々はびっくりさせられたのです。ぐいと引っ張るかと思えば、押し潰すかのようにもするし、後にはこすり合わせたり、いかにも遊んでいるふうにならぬ指を互いに組み合わせたりもしております。その次の観察では、チャールズは最初のオッパイを吸っていた折のこと、勢いよく吸ってたかと思うと吸うのを止めるといったふう交互に切り替えることをしました。その一方で彼の右手は握りしめられていて、口に何ら動きがないときは彼の握られていた右手は開くという具合でした。吸い終わった後には、彼が自分の両手で遊んだような動きと同様に今度は母親の手といっしょに遊ぶのが見られました。われわれはセミナーにおいて、彼の手はその動きにおいていかにも口みたいであること、そして母親の手はその意味においてオッパイのようでもあること、そんなふうにならぬ彼の2つの手が時々互いにオッパイに対する口のように関係付けられるのがここに示唆されているのではないかと、そのように思い至ったわけでありました。

2つ目のオッパイを吸うとき、チャールズはとても穏やかに吸います。両手をオッパイの乳首に近い辺り

におきます。やさしく撫で回したり、時としては両手をいっしょに近付けるようにいたします。それとは対照的に、最初のオッパイを吸う時は力強く、手は硬く握られていたり、乳首からかなり隔たったところに置かれたりするといった具合でありました。

この論文の初めでも触れましたけれど、こうした彼の2つの乳房に対してのかかわり方の分裂 (split)、そしてそれに伴う手の動作の‘パターン’はその後いっそう際立って強固になってゆきます。それらの違いをどのように説明するにしろ、こうした些細な振る舞いに重要な意義があることは否定できません。チャールズは、明らかに2つの乳房に対してまるで違ったふうに自らを関係付けさせておりました。彼の手はまるで口のように振舞っているみたいなのです。彼はその両手を、2つ目のオッパイには近付かせるのに、最初のオッパイからはわざと遠ざけようとするわけでありました。彼は母親の手を、まるで彼の口がオッパイを扱うかのようなしぐさでもって自分の手で扱うわけなのです。そして時としては彼の両手は互いに口がオッパイに関わるように関わり合わせるといったふうでした。彼の口が自分の手に恰もオッパイのようにして関わらせていたのと同じように…。ここからこれは、部分対象 part-object であるオッパイに対しての関係性とはその後のよりいっそう複雑な関係性が育まれる、そうした基本的な装置 the basic unit であることの証拠事実 evidence とは言えないでしょうか？ 指を互いに組み合わせたり、突っ込んだり突き立てたりするのは同一化 identification を達成するための投影的モードであることの証拠事実 evidence でしょうか？ 勢いよくオッパイを吸うことと交互に両手が遠くへと遠ざけられかつ握りしめられるというのは、オッパイを空にしないためにわざと控え目にしようとしているといった、そうした何らかの試みの兆しとして見做していいでしょうか？ ここに無数ともいえる、さまざまに興奮を引き起こす疑問 questions が頭をもたげてまいります。それらは研修生に、《無意識》の大部分は尚も未知であり、精神分析によってさらに探究されてゆかねばならないことを示すものとなりましょう。

ここで私の概括的な印象を述べますと、研修生はどなたも、赤ちゃんのなかで早期の分裂のプロセスが、そしてまた魅了されたところの対象の身体的部分との同一化がどのように取り組まれているのかを、こうした観察の証拠事実 evidence をとおして実感しながら学んでゆくようであります。それぞれが幼児の心の機能を認識する上でどのような理論的枠組みを選択していたとしても、それとは関係なしに…。乳幼児観察の経験は、いずれ成人および児童を対象とした臨床経験へと繋げられてゆくことになるわけですが、それは彼らにとって患者の全体の行動を分析的状況のデータの一部として観察することの重要性について確信をもたらし、同時にまた早期発達が分析的に再構成され得ること reconstruction の妥当性に関しても信頼を深めるものと、私は考えております。

※原典; Notes on Infant Observation in Psychoanalytic Training

by Esther Bick

International Journal of Psychoanalysis (1964). Vol. 45. pp. 558-66

【訳者あとがき】

山上 千鶴子

このMrs. ビックの【乳幼児観察の覚え書き】でもっとも注目されるのは、赤ちゃんが母親（養育者）とのかかわりの中で固有な動き（パターン）を創ってゆくという指摘である。そこにその子どもの‘彼（彼女）らしさ’の兆しが覗かれるという点で、それは《私の成り立ち》の萌芽とっていい。観察者としてそれに立ち会う興奮は、現代においてわれわれが胎児を3D・4D超音波映像で眺めることの衝撃に匹敵するともいえよう。観察記録を俯瞰すると、赤ちゃんの「ころ」がまさに‘自発自転してゆく’営みが辿られ、その軌跡は視覚的に形象化し得るものとなる。赤ちゃんは、なんとまあ‘考えている’のだ！われわれの眼前にそれがありありと見えてくる。これこそが「乳幼児観察」の醍醐味である。

この赤ちゃんの「ころ」が紡ぐところの固有の‘パターン’は、「児童のサイコセラピー」という臨床場で展開する‘転移現象’にまさに直結してゆく。そこで真実何が起こるのかは、遡れば誕生以来その子どもが赤ちゃんの「ころ（無意識）」に蓄えてきた固有の‘パターン’が露呈されるものと知る。それは実に侮り難いリアリティを帯びている。プレイの中で‘シークエンス’の繰り返しということが起こるのだ。執拗に同じ場面展開が繰り返される。概してそれは‘不在対象’を巡ってであり、決まってセッションの休み前後に猛烈に勢いづく。そこに提示された心のあり様は紛れもなしにその子どもの‘彼（彼女）らしさ’と了解されてゆく。この衝撃性こそがセラピーの眼目である。それを深く会得し得るには実に「乳幼児観察」の経験という下地があってこそなのだ。畢竟成人を対象にした精神分析についてもそうであろう。それぞれが語る言葉を介して、ころは己れ固有の筋道（ミュートス）を物語として紡ぐ。そしていわゆるフロイトの「ワーク・スルー（work-through）」ということになるわけだが、赤ちゃん以来厳然として《私の成り立ち》の中核を占めていた‘内なるパターン’が無意識の闇から炙（あぶ）り出され、解明されてゆく。それは譬えていうならば‘へその緒’みたいなもので、‘自分が自分であること’の錨（いかり）でもあり錘（おもり）ともいえようから、自己を問うとしたら、まずそこに立ち還るしかなかろう。そして、もしもその自らが創り出した‘因縁’にいのちが翻弄され、がんじがらめとなり、‘堂々巡り’の同じ轍（わだち）に嵌ってしまっていたとしたら、やがてその悪循環から脱け出し、主体はいつしか自由に舵取りすることを選んでゆくであろう。このように概観すると、成る程、Mrs. ビックが【タヴィストック】の児童サイコセラピストの養成コースに、さらには【the Institute of Psycho-analysis】における精神分析家の訓練コースに「乳幼児観察」を必修科目として導入したことは‘戦略的’に正しかったと評価される。その炯眼を称えていい。

1979年秋にロンドンから帰国して以来、私は《タヴィストック流の乳幼児観察》の導入を考えなくはなかった。だが私にはどうにも無理だと判断した。医療・教育・保育の現場からの後ろ盾もしくは連携を期待できるとは思えなかったからだが、それ以上に問題なのは、このMrs. ビックの論文を読んでもお分かりのとおり、「乳幼児観察」に携わる個々の観察者がどのように自らをコンティンできるかが大きく問われる。【タヴィストック】という組織があって、それでトレーニングの中に位置づけられていてこそそれも辛うじて成り立つという気がしてならなかったわけで・・・。

さらにはもう一つ、個々人の資質というもある。適性が問われるという意味でだが・・・ここで幾つか思い浮かんだ面影を語ろう。かつて【タヴィストック】で私の同期にリサという女性がいた。病院でプレイ・リーダーの仕事をしていた。私とほぼ年齢は同じぐらいで、周りと比べてもわたしたちは若かった。その親近感のせいか彼女は私に気安くいろいろ語ってくれた。確かMrs. ハリスの「乳幼児セミナー」で一緒にいて、そして同じ時期にわたしたちはそれぞれに赤ちゃん観察を始めたのであろう。彼女は愚痴った。<Nothing happens! So boring! (何も起きやしないわけ。もう退屈で退屈で・・・)>と。気の毒に思った。私は当時ペピの観察が面白くて夢中なのだったから・・・そして、やがて彼女は【タヴィ】から姿を消して行った。もしかして経済的に逼迫していたせいだったかも知れないが・・・それからもう一人、カナダから訪れた男性が思い浮かぶ。彼が観察に通い始めた家庭というのがたまたまどうにも不運 unlucky としかいいようのない、まさにお気の毒な状況にあった。彼の発表を聴いたセミナーでは児童虐待ではないかといった嫌疑が持ち上がった。彼は怖気づいた、もしくは嫌気が差したということだったろうか、やがて【タヴィ】から姿を消した。どこか別のトレーニング機関へ鞍替えしたと噂されていた。そして、St. George's Hospitalで私の同僚であり、【タヴィ】の先輩でもあったアメリカ人のジェニファーを想い出す。乳幼児観察は大してインパクトはなかったとつまらなそうに語っていた。彼女も【タヴィ】コース修了半ばで去って行った。探しているものがそれぞれ違う。それもいざいざだろう。【タヴィストック】では留まるか去るかは自分が自分で選ぶ。まさにその通りなのだが。それに、Mrs. ビック譲りの「乳幼児観察」へのパッション(熱狂)に皆が皆喜んで感染するはずもなからう。この場合、‘面白がる力’こそが決め手になるといえようが、それは誰かに教えられるものでもない。そんなことをつらつら考えると、《タヴィストック流の乳幼児観察》を誰にでも勧めていいとは思えなくなる。だから‘時期尚早’ということばで、私は動かなかった。「乳幼児観察セミナー」を呼びかけることは一度もしていない。

日本における児童臨床は、精神分析的なオリエンテーションを持つことが一般に支持されていない。それがネックだと薄々感じている。だとしたら《タヴィ流の乳幼児観察》は此の地では定着しないだろう。それは元来「児童臨床」へと直結させてこそ意味があるのだから・・・。だとすると、やはり惜まれる。毎週の家庭訪問による乳幼児観察は日本の家庭事情が許さないとしても、もしかして身近なところでご縁があれば、折々に気軽に赤ちゃんの観察に立ち寄らせてもらうといったこともアリではないか。それよりも簡単なのは、近くの保育園・幼稚園での子どもの遊戯観察をやらせてもらうというのはどうだろう。2、3年間同じところに通えば個々の子どもがそれぞれ固有な‘その子らしさ’の姿を現してゆくのが見てとれよう。子どもの‘自発自転してゆくのち’の軌跡にもしも遭遇できるとしたら、それは実に得難いとはいえないか。そして私の綴ったロンドンの子どもたちの遊戯観察レポートとぜひ比較して欲しい。

それで蛇足ながらここに一つ問題提起をしておきたい。日本の子どもたちは幼少時から集団(群れ)の中に密着して育つせいか、‘個 individual’ というものの輪郭がどうもclear-cutではない。自己なるものの構築 construction といった自覚が甘いというか緩(ゆる)いと言わざるを得ない。これは私がこの30年余こ原宿で成人を対象にした精神分析的臨床に携わっているが、どうしても頭打ちだと常日頃感じていることに通底する。時代が‘個’に味方していると思われる節もあるけれど、確か

に或る一面ではそうだろうが、概して集団主義が相変わらず蔓延っている。子どもがどんなふう育てられているのか、彼の国と日本と、その異文化的視点をもっと必要なだろう。精神分析的オリエンテーションなるものの是非というも、そこから論議されねばならないかも知れない。一つだけ分かっていることがある。どうやら我国では保育園に通う頃には子どもたちは<お友だちと仲良くするのよ>ということが奨励されるばかりだという印象がある。それは私のイギリスの《プレイ・グループ》では経験していない。それぞれの子どもがそれぞれに「個」を表現することが尊重されている。だから養育者らは敢えて子ども同士を互いに仲良くさせようとはしなかった。そもそも<仲良くしなさい>といった日本語は英語に翻訳できない。そうした発想がないから、言葉にできないということでもある。それとは対照的に、日本では子どもの「個」の表現を面白がるよりも群れの統制(まとまり)を重んじる嫌いがある。一人でいる子どもをむしろ疎んじる気風はないか。そうした場合、おそらく保育者は彼(彼女)を集団の輪の中に加えようと誘導を試みるだろう。そんな印象があるのだが、実際のところ私は知らない。私は日本での子どもの自由遊戯を観察はしていないからだ。敢えてここで私の‘盲点’を次世代に託したい、と私は身勝手ながら思っている。

さて、もう一つ、Mrs. ビックの論文に戻って、気掛かりに思うことがある。この論文にしてもそうだが、概してMrs. ビックならびに彼女のお弟子さんたちの赤ちゃん観察記録のなかではどうも母親たちが‘寡黙’がちなのが気に掛かる。私の赤ちゃんだったペピの母親のMrs. Pの開けっ広げさ、それと同じを期待するのは無理があるとしても…。観察者という立場からして、彼女らそれぞれの内面に深く立ち入ってゆけないのは致し方ないとしても、心底で母親が何をどう感じているものやら、その内面の声が十分に聞かれようとはされていない。だから読んでいても歯がゆい。とても惜しい。殊に、母親についてMrs. ビックの‘抑うつ的 depressive’といったような指摘がある場合、ちょっと待ってと言いたくなる。もしも母親が新しい一つの‘命’を抱えることの重圧に耐えかねて、心震わせ、悩み感うとしたら、それは健康な‘抑うつ感 depression’とむしろ言っているのではないか。観察者の視点では何やら捉えきれない恨みはないかとふと思う。独断と偏見が怖い。母親たちに聞いてみたい、自分をもっと語らせてみたい、と私は思った。

そんな折も折り、かつて仕事で一緒に働いたことのある心理臨床士で、その後お子さんに恵まれ、母親となり父親となられた方たちからおたよりをいただくことがあった。その中でご自分の子育て経験を縷々語ってくださっていた。親としてのご自分の心の裏側の揺らぎを面映げに吐露しながら、我が子の育ちを嬉々として語る。そのリアリティが実に得難いと私は大いに喜んだ。そんなふうにおかあさん！おとうさん！と呼ばれる日常の風景のなかに自己陶冶の緒(いとぐち)があったのだ！かくして分析セッションの中でのワーク・スルー(work-through)は引き継がれ、それぞれに自分との対話は続けられ、尚も切磋琢磨が続いているらしいと覗かれた。心理臨床に携わる一人ひとりが‘パイオニア’だ、と私は思っている。このようにして親となった心理臨床士それぞれが子育てを経験しながら、その折々のこのころの内なる眩きを「精神分析」に取り込んでゆくことがあれば、いつしか随分と違った「精神分析」になるだろうと、そんな未来を頼もしく夢見たのであった。(2015/03/20 記)